第 23 回 NPO 自然博ネット総会記念講演

ボルネオ島の自然と今

安間繁樹

講演者；安間繁樹先生

マングローブ

フタバガキ林

ボルネオ島と静岡は大きなつながりがあった。かつて折戸湾の奥に係留された膨大なラワン材、最初はフィリピンからだが、その後はほとんどボルネオから輸入された。

ボルネオ・インドネシアでは「カリマンタン」と呼んでいる。面積 746,000 平方 km、日本の 2 倍の広さがあり、世界で 3 番目に大きな島である。また開発が遅れ、世界最大規模の熱帯林が残ってきた島である。

ボルネオは 3 つの国から成っている。北西部はマレーシア国のサバ州およびサラワク州で、2 つ合わせて東マレーシアと呼ばれる。また、北西部にはブルネイ王国がある。島の 3/4 を占める残りの地域はインドネシア国のカリマンタンである。

1 年を通して常に夏の気候だが、乾季と雨季がある。4 ～ 9 月が乾季、10 月～翌年の 3 月までが雨季である。気温の変化はほとんどなく、月平均気温は、平野部で 27 ～ 28℃。日中の最高気温は 30℃を超える。年間降水量は、平野部で 2,000mm、山間部では 5,000mm に達する。

ボルネオにおける森林限界は標高 3,500m である。3,500m 以下は、かつては , 熱帯林と総称される森林で覆われていた。熱帯林は、標高、地質、降水量の違いで幾つかの違ったタイプの森林になっている。陸上だけでなく、マングローブや泥炭湿地林のように水上に発達する森林もある。

熱帯林の中でも、ボルネオの 70%近くを占める森林が「低地混交フタバガキ林」である。一般に熱帯林（熱帯多雨林）といったら、この森林のことと理解してよい。名前は優占する樹木の和名「フタバガキ」に由来している。フタバガキ科は多くの商業木を含み、材は「ラワン」と呼ばれている。森林の高さが 40 ～ 50m、中には 80m に達する突出木もある。この顕著な森林の立体構造が「生物の多様性」を支えている。「多様性」とは、簡単に言えば生き物の種類数が多いこと。森林が作り出すさまざまな環境に合った生き物が , お互いに関わり合って存在しているということである。

哺乳類は 223 種が記録されている。大型の動物ではアジアゾウやスマトラサイ、バンテンなどがいるが、多くはヤマネコやジャコウネコ、サルなどの中型動物、リスやネズミ、コウモリなど小型の動物たちである。オランウータン、テングザル、メガネザル、スローロリスといった霊長類が多いことも特徴の一

つである。

鳥類は 669 種 (2011 年の記録)。ワニやトカゲ・ヘビ類は 276 種（2016 年）。カエルは 186 種。大きなサソリやトリクイグモ、大きさ形、色とりどりの昆虫類。ボルネオは生き物の宝庫である。

「眠れる島」であったボルネオだが、第二次大戦後、開発の時代が始まった。1960 年代から 1970 年代は、木材・原油・天然ガスといった一次産業が中心だった。特に森林資源に大きく依存し、木材の伐採が盛んに行われた。しかし、森林資源の枯渇が危惧され、1980 年代には、そういった天然資源を現地で加工し輸出するという産業への転換が試みられている。1990 年代に入ると、観光など第三次産業も重視されるようになった。

現在、ボルネオ全体では森林伐採の時代が終わり、アブラヤシ栽培が産業の主流になっている。日本でインスタントラーメン製造の過程で使われる油や洗剤の原料としての油は、ボルネオから入ってくるヤシ油から作られている。アブラヤシ栽培はもっとも重要な産業であり、現在これに取って代わる産業がない。しかし将来、ボルネオ島のほとんどが荒れた原野になってしまう危険をはらんでいる。

オランウータン

フタバガキの伐採

コウハシショウビン

トレーラーによる木材の搬出

マレーオオトカゲ

アブラヤシのプランテーション